

ブラームス交響曲第四番（ホ短調）

はーげー、はーげー、...

こんな馬鹿な歌詞をこの曲の冒頭のバイオリンのメロディにのせて歌いながら、後輩と二人して禿げ上がったおでこを晒して大学オケの宴会芸をしたのは二十歳の春。本当のメロディは「はーげー、えーつえー、...」（ドイツ語音名でHG、EC、...）なのだけれども。

6年という月日は、あんな芸も気楽に出来なくなるくらいまで、私のおでこを蝕み、私を重度のブラームス嫌悪症患者に仕立て上げました。ブラームス嫌悪症—
恐怖症とも言いますが—

は、日本というクラシック音楽大国において、とても稀な病気であり、そして奏者として致命的な病いです。というのも、この国では年がら年中、どこかのホールではブラームスの4つの交響曲がプロ・アマ問わず演奏され、ピアノやバイオリン（チェロとの二重協奏曲も）のコンチェルトが鳴り響き、今宵もお隣の小ホールで、「ブラームス・室内楽の夕べ」なる演奏会が開かれていたりするのです。そして、私の行きつけの饅頭屋では、いつも彼のクラリネット五重奏曲が流れています（モーツァルトのだったらよいのになあ）。そんな中で、ブラームスと接することなく生きることは不可能なのですが—
そして、彼の書く音楽は、いつもどのパート譜面もお腹いっぱいになるほどに充実していて、一つとして無駄な音がないこともよく分かるのですが—

どうにも、彼の音楽の執拗さと重厚さにアレルギーを感じるようになってしまいました。勿論、ヨーロッパでもブラームスは重要なレパートリーであることには変わりないのですが、オペラを書いていないことも手伝ってか、日本ほど、ハイドン、モーツァルト、ベートーベンと同等の知名度があるようには思えません。「3大B」をバッハ、ベートーベン、ブラームスと言ったのは指揮者のハンス・フォン・ビューローでしたが、ブラームスと反りの合わなかったワーグナーはブラームスの代わりにブルックナーを入れたのだとか。ラテン系の国ではこの傾向はなおさら強く、今でもピンとこない人は多いようです。例えば、ある世代にはとても親しみのある、フランソワーズ・サガンの《Aimez-vous

Brahms?》（邦題：「ブラームスはお好き」）でも主人



夫ロベルトと共にボンに眠る
クララ・シューマンの墓

公の“アラフォー”の女性ポールは、若いツバメ、シモンからのデートの誘い文句《Aimez-vous Brahms?》

に戸惑い、慌てて一度も聞いたことのないバイオリンコンチェルトのレコードに耳を傾けるシーンがあります。どうも最近では流行らないサガンですが、“あの時代特有な”フランス趣味は、50年経った今でも色褪せない独特の雰囲気があつて私は好きです。

作中、ポールには同年代のロジェという恋人がいながら、シモンとの関係を深めていくのですが、ブラームスの私生活でも似たような愛憎劇が繰り広げられていたのは、広く知られていることです。最近公開されたヘルマ・ザンダース＝ブラームスの映画「Geliebte Clara」（邦題：「クララ・シューマン 愛の協奏曲」）にも詳しいですが、師匠のロベルト・シューマンの妻、クララへの恋心を、14歳年下のイケメン、ヨハネス・ブラームスは生涯持ち続けていたのです。他の結婚話も破談にしてまで、ヨハネス・ブラームスはクララを想いましたが、生涯（ロベルト・シューマン亡き後も）結婚するわけでもありませんでした。ロベルト、ヨハネスという二人の大天才を惑わしたクララとは如何なる魔女だったのでしょうか。そして、私が彼の音楽を聞いて哀愁とともに目眩と吐き気を覚えるので、あるいは、日本で彼の音楽が延々と人気を博している所以は、おそらくこの魔女への執拗なまでの愛に依るところが大きいのではないのでしょうか。

交響曲第四番は、もっともブラームスらしさが出た曲だと思います。というのは、例の一楽章の「はーげー、はーげー、…」のバイオリンの冒頭メロディから始まります。この美しくも切ない途切れ途切れの歌は、木管楽器の暖かいけれども重く引きずる和音に追いかかけられ、やがて細やかな下降音型が聞こえてきます。これは、一見すると雪解け水がちょろちょろ流れているようですが、実は永久機関のような装置で汲み上げられ、同じ悩みを駆け巡るだけなのです。気持ちを一新しようとするかの如く、管楽器が奇妙なリズムで咆哮しますが、行ったり来たり of 悲痛なまでの思いはチェロとホルンの大きなうねりに続きます。師匠のシューマン先生が言わば墨彩画のような微妙な筆の違いで音楽を表現したのに比べて、何と派手な絵の具での愛情表現でしょうか。私の個人的な不満は、これだけ大掛かりなことをしておきながら、そして、痛くも優しい音に包まれておきながら、行きたいところにたどり着けないまま、ティンパニーの悲しいホ音の連打によって、何のメッセージも伝えられなかった（例えばクララちゃんに）ということにあります。ひとりで悶々と壁の斜向かいを見つめ、ああでもこうでもよくない、と葛藤する彼の姿が想像できて痛々しいのです。

ホルンのソロから始まる二楽章は、中世の教会旋法（フリギア調）で書かれ、クラリネットのメロディに何とも言えないアンニュイなファゴットの伴奏が加わり、またもや、「言いたいことがあるんなら、言えばいいじゃん！」というイライラに苛まれます。しかし、頑固で美しく思慮深いこの音楽にあつては、そんな文句すら無意味です。何となれば、最後には全ての悩みと想いは昇華され、結晶のような管楽器の和音で締めくくられるのですから。

こんな曲の中にあつて、否、ブラームスの心の曇り空の中にあつて、三楽章は貴重な音楽です。ハ長調という大自然の音階の中ではじける、ご機嫌な響きを感じます。決してノリノリの曲ではないけれど。

この演奏会の前半で登場するリヒャルト・シュトラウスは、初演でこの楽章のトライアングルを叩いたのだとか。どんな音色だったのでしょうか？

この楽章、気晴らしとも捉えられますが、もしかして、いつも難しい曲ばかり書いているブラームスが、恥ずかしそうに、「僕、こんなところもあるんだ」って頬を赤くしているのだとしたら、私は今すぐ彼へ謝罪してファンクラブの会員に転身したいとすら思います。

けれど、そこはさすが（！）ブラームス先生。バロック時代の変奏曲（シャコンヌ）という大昔の手法で終楽章をしめるのです。ブラームスは元来変奏曲にめっぽう強いですが、この楽章ではその能力がふんだんに発揮されており、とても魅力的な曲です。弟子のドヴォルジャークのメロディ着想能力を羨んでいたブラームスですが、どうしてどうして、この楽章には一瞬出てきてはそれっきりの、使い切りメロディー（それも特上）がごろごろしています。例えば、フルートの長いソロ、トロンボーンのコラールを経て、（偽）再現部に戻った後の子守唄のようなメロディーは、私は何よりも最も嫌いで、それでいて頭の中でのリピート回数ダントツ一位の、複雑な気持ちになるメロディーです。行きそうになっては戻り、自分では感情が支えきれないのに、決してそれを爆発させようとはしない。やるせないブラームスの心を体現しています。

そんな中で、一楽章と似た雰囲気を出しながら救われない叫びと共に、シンフォニーは終焉を迎えます。

さて、ここまで吐き気だ目眩だ書いておいてなんですが、実はブラームスのプライベートというのは、頭はいいけれどただ気難しい髭もじゃのおっさん、という訳でもなかったようです。ウィーンに彼の行きつけの食堂「Zum roten Igel」（「赤いはりねずみ」）というのがあったそうですが、そこにルンルン気分で向かう彼が目撃されていたり、そこで彼と話がしたいがために待ち伏せしてる街の人々がいたり、音楽的に反目しあっているとされたブルックナーと肉団子を食べ仲良くなったりと、親しみやすい一面があったというのです。ブラームス先生、これまでのご無礼をお許しください。今度から毛嫌いせずに先生の作品に挑戦します（今回、私はこのシンフォニーには出演していません）。

そういえば、私もこの春にウィーンを訪れたときに「Kokoro」という創作料理屋とそこの大将にぞっこん惚れてしまいました。ウェスティン東京・大阪の総料理長等を歴任された後、故郷でゆっくり店を開き、EUのお偉いさんがこぞってやってくるような店なのに、学生にはワインをタダでサービス。多国籍の学生仲間で大将を囲んで深夜楽しく飲み語り、また来てね、と何度かメールのやり取りもしていました。先月、その大将が突然亡くなりました。とても悲しい出来事で、一度しか会っていないのに随分長い間困惑しました。でも彼の力強かった言葉たちがいずれ「Kokoro」の糧になってくれると信じています。この料理界の天才の名前は、ヨーゼフ・ハウスベルガー。大将、今度は天国で、ブラームス先生に美味しい料理を食べさせてあげてください。合掌。

（ファゴット 富士延章）